

## ◆ほんの紹介◆

# 『古都発掘 — 藤原京と平城京 —』

田中 琢 編 (岩波新書468、1996年11月刊、242頁、680円)

岩本 次郎

年報編集者からこの著作紹介の執筆要請をうけたときには、戸惑いを禁じ得なかった。しかし、かつて永年の間、禄を食んでいた者としては、報恩の一端にでもなろうかということと、年報の記録性に鑑みて、研究所員のみの執筆による刊行物を記しておくことは、意義があることを考えた。そこで要請をひきうけたしだいである。まず、本書の構成に触れておこう。テーマに続いて括弧内に内容の要点と執筆者名とを示す。

## ◆第Ⅰ部 藤原京

1 都市の時代がはじまる (藤原京は大宝令の制定、和同開珎の発行、遣唐使の復活が行われた日本最初の本格的計画都市 黒崎 直) 2 造営はいつからか (694年の遷都の約10年前から 黒崎 直) 3 宮の位置をめぐる論争 (大宮土壇=藤原宮大極殿説への定着 上原真人) 4 大きさはまだ決まらない (岸俊男説と「大藤原京説」大脇 潔) 5 都市名はなかった? (『日本書紀』に「藤原京」の語句なし 橋本義則) 6 消えた古墳 (横穴墓を壊して造営 次山 淳) 7 造営用材の調達 (近江の田上山から水路経由 上原真人) 8 メインストリート=朱雀大路 (路面幅17.7m、東西両側溝幅7.1m、側溝中心間距離24.8m 深澤芳樹) 9 宅地のありさま (右京7条1坊の貴族邸宅 深澤芳樹) 10 市は何か所か、二か所か (宮の北側の米川沿いに二か所 西口壽生) 11 トイレはどうしていたか (くみ取り式と水洗式 黒崎 直) 12 瓦葺きの宮殿 (日本最初の宮殿使用 佐川正敏) 13 瓦工場の転変 (香川県~滋賀県の6地域10か所以上 花谷 浩) 14 宮を囲む堀=大垣 (高さ5.5m、総延長約3.7kmの一本柱土壁 黒崎 直) 15 木簡が教える門号 (宮城十二門の名前確定 西口壽生) 16 構造がわかった二つの役所跡 (西方官衙馬寮と東方官衙の遺構 松村恵司) 17 どんな役所があったか (六官・膳職などから八省へ 古尾谷知浩) 18 医療を担当する役所 (薬物木簡と内薬司・典藥寮 黒崎 直) 19 論争に決着をつけた木簡 (評から郡へ 館野和己) 20 皇子の邸宅 (天武天皇の諸皇子の宮跡 猪熊兼勝) 21 貴人の墓 (京の南から南西に配置 金子裕之) 22 火葬が始まった理由 (任地からの帰葬 上原真人) 23 初めての貨幣 (無文銀銭→和同開珎・銀銭→和同開珎・銅銭 大脇 潔) 24 魔除け・招福の銭貨 (「富本」銭の意味 金子裕之) 25 最古の人形 (銅製人形は天武の病氣治癒祈願 金子裕之) 26 まじない札の発見 (陰陽道のルーツを示す 松村恵司) 27 藤

原京はなぜ短命だったか (遣唐使の最新情報を採用 黒崎 直) 28 遣唐使と都の建設 (704年帰朝の栗田真人の収獲 佐川正敏) 29 新羅の都の場合 (山城に囲まれた慶州 千田剛道) 30 藤原京焼亡説 (『扶桑略記』が伝える焼亡の痕跡は未検出 黒崎 直) 31 二つの薬師寺 (平城京への移建はなかった 花谷 浩) 32 水田耕地と化した都 (地中に没した都市計画地割 上原真人)。

## ◆第Ⅱ部 平城京

1 京域の復原 (地表に遺存する都市計画地割 町田 章) 2 「平城」の呼び名 (「ナラ」の意味と「平城」の発音 山下信一郎) 3 古道と都のメインストリート (路面幅67.5m、東西両側溝幅約7.0m、下ツ道を3倍に拡大 小澤 毅) 4 造営に用いた尺度 (大尺・1尺=35.5cmと小尺29.6cmの使用 井上和人) 5 宮城十二門をめぐる (東院南門の検出で門号確定か 長尾 充) 6 儀式と執務の場=朝堂院 (首都の朝堂は十二堂 金子裕之) 7 「移転」か「併存」か (内裏は固定、大極殿は移転、朝堂は併存 岩永省三) 8 大嘗宮の発見 (大嘗会の回数は三度か五度か 山崎 信二) 9 内裏・曹司・東院 (天皇と役人の執務の場の変化と皇太子の居処 金子裕之) 10 建築資材のリサイクル (柱・レンガ・瓦の再利用 島田敏男) 11 瓦からみた中央と地方 (国分寺に平城宮式の軒瓦使用 佐川正敏) 12 瓦の発注と納品 (3カ月以内に30,000枚の瓦納入 佐川正敏) 13 「瑠璃瓦」と「玉宮」 (施釉の瓦とレンガが東院から約300点 毛利光俊彦) 14 技巧に満ちた庭園 (日本庭園の出発点を東院にみる 小野健吉) 15 貴族と庶民の住宅 (身分の差で宅地は60,000㎡から500㎡まで 小林謙一) 16 長屋王邸の人びと (妻子・親族・役人・技術者が同居 館野和己) 17 二つの家政機関 (長屋王とその父高市皇子の組織か 山下信一郎) 18 鼠を進上する木簡 (鼠は鷹狩の鷹の餌 森 公章) 19

板に描かれた楼閣山水図 (中国の山間部の離宮か山荘 浅川滋男) 20 市のありさま (東西両市の賑わい 川越俊一) 21 土器が教える人びとの生活 (地方から漆・塩・麴の出し汁を運ぶ 玉田芳英) 22 釐金工場跡か=都の中の手工業 (鋳物・鍛冶工場は宮にも京にも存在 杉山洋) 23 宮のなかで働いた職人たち (1日500基製作の百万塔の仕上げ具合 森本 晋) 24 出土品からみた国際交流 (大安寺出土の腕枕は唐から渡来 千田剛道) 25 なぜ銭貨を埋めるのか (子供の成長、建物の安泰を願う土地神への供え物 金子裕之) 26 暦をめぐる話 (701年に干支から年号へ 古尾谷知浩) 27 納税方法を解説する (郷単位で徴税品をとりまとめ、郡と国を経て都へ 寺崎保広) 28 役人たちの勤務評定 (木簡で判る下級役人の昇級 館野和己) 29 封書のはじまり (木簡にみる二通りの封 渡邊晃宏) 30 平城京の街路風景 (街路樹は柳・橘・エンジュ、側溝は下水道 小野健吉)。

字数の関係で、要点のまとめ方が恣意的、かつ的外れになったかと懸念するが、お許しいただきたい。各テーマ名から察しえたとおり、叙述は平易であるが、内容を的確に理解するには、相当の予備知識を要するに思われる。そうした意味から、できれば平城京条坊の全体図、

天皇家・藤原氏・長屋王家の家系図などが該当箇所の余白にあり、天武朝末年~8世紀に至る略年表と、各項目に関わる参考資料 (概報・報告書の類) などが巻末に付載してあればよかったと考える。また、些細なことでは、平城京の5で、『続日本紀』にみえる的門について言及がないこと、同じく22で、釐金工場跡かとすることが気にかかった。ことに後者はその証明は難しいものの、立地からして官営もしくは公認の工房であった可能性もあろう。

以上、内容の要点、そして若干のコメントを述べてきたが、本書が藤原京と平城京の今日的課題とその解釈の提示において、高い水準を保ちながら、啓蒙書としての使命を十分に果たしていることは論をまたない。編者ならびに執筆者各位の労を多とするものである。

1952年の創立、そして1959年に平城宮跡、1970年に藤原宮跡、それぞれの本格的発掘調査の開始があり、それ以降、着実に顕著な成果をあげてきた奈良国立文化財研究所が、2002年には創立50周年を迎えることとなる。発掘・研究調査以外にも、国際交流・資料館展示・史跡整備・研修指導など多彩な分野において、業務は今後ますます多忙になることと思われるが、所員各位のますますのご活躍と研究所のさらなる発展を期待して筆をおくこととする。

(甲子園短期大学)

